

滋賀県下における「多世代共創・共育による地域の“ビジネス”モデル発見と若者活躍」への アドバイス

滋賀県推薦都市農村交流アドバイザー（分野：合意形成）

上田 洋平

〔公立大学法人滋賀県立大学地域共生センター 講師〕

1. 取組概要

地域活性化にあたっては、地域づくりの主役である住民が「自分たちは何を一番大切にして地域づくりを進めていくのか」という「暮らしのものさし」を持ち、共有していることが必要だ。そのためには住民自身が地域の課題だけでなく、地域の資源や魅力について把握し理解していることが大事である。ところが、地方の農山村のなかには住民自身が「自分たちの地域には何にもない」と公言してはばからないような地域がある。

こうした問題に対して主に2つのやり方で支援をしてきた。そのひとつは、私自身が開発した「地元学」の手法である「ふるさと絵屏風を用いた地域資源の発掘と次世代への継承」であり、もうひとつは大学における地域共育プログラムの運営に携わってきた経験と立場からの「学生力を活かした農山漁村地域の活性化と人材育成」である。

2. 取組前の地域の現状

多くの苦難を乗り越えて何百年も人々がそこで暮らしてきた事実があるにもかかわらず、地方の農山漁村の人々は口々に「自分たちの地域には何もない」という。そのような自己評価の上に、「ないものねだり」の心理に陥ってしまう状況も見られた。そうしたなか、当然、地域における暮らしの歴史（災害の記憶も含めて）や地域本来の魅力・資源は、次世代には継承されないままになっていた。

また、地域で生まれた子供たちを「他出」させてきた結果、地域の行事や生業・コミュニティ維持のための取り組みが続けられなくなっていた。

3. 具体的なアドバイス

提唱している「ふるさと絵屏風づくり」は極めて簡単で、地域の人々の生身の「五感体験データ」をもとに地域の暮らしの物語を皆が協力して「ふるさと絵屏風」という絵にする。それを見ながら語り合うことで地域の魅力を発見・共有する。特異で珍しいものばかりに目を奪われて「なにもない」というのではなく、むしろ「なにもない、と言いながら、そのなにもないということ、すなわち“無事”の状態を何百年にもわたって持続してきた地域の力」にこそ目を向けることを提唱している。

また、アドバイスというより実践活動として、授業等の機会を活用して、学生が地域の中に継続的に入り込み、時にはそこに住み込み、地域に関わる環境をつくってきた。近年ではとくに地域から出た「他出子」と学生の関わりをつくるように仕向けてきた。学生には地域内でのコミュニケーションを促す「触媒効果」があり、世代間の対話やつながりの再編が生じるからである。

4. 地域の変化

「ふるさと絵屏風」によって、地域に対話や経験の継承が生じている。子供たちの地域へのまなざしが増え、地域への愛着を高める機会となっている。絵屏風はそれ自体が観光資源になるため、制作をきっかけにエコツアーを開発し、交流人口、外部経済とのつながりが生まれている。また、高齢者に居場所や役割が生まれ、地域の健康・福祉増進にも役立てられている。

加えて、学生が地域に通い、住まい、関わりを育んだことにより、地域出身の「他出子」が、

祭りの担い手として戻って来た例（近江八幡市沖島町）、学生のフィールドワークをきっかけに伝統行事が20年ぶりに復活した例（長浜市鍛冶町屋太閤踊）、耕作放棄された茶畑を学生が借り受けて栽培から販売まで手掛ける活動を行った結果、卒業生が定住、脚光を浴びるようになり、地域の生産組合の設立につながり、活路が見えてきた例がある（東近江市政所町）。

5. 取組の効果と地域が変化するために必要なこと

取組の効果は上記の通り。「ないものねだり」ではなく「あるものさがし」が起点になる。新しいことや珍しいこと、事を起こす、すなわち「有事」を志向する「ビジネス」も大事だが、「ここで、ともに、無事に」という人々の願いが育んできた生き方や技術、すなわち「無事の文化（“ビジネス”モデル）」こそが真の地域資源である。そのビジネスモデルが危機に瀕し「無事の崩壊」という「有事」に直面している。今日の「地域づくり」とは、「無事」を維持するための闘いであることを認識しよう。

若者や学生の活躍のためには安易にマニュアル化しないこと、「葛藤するチャンス」を奪わないこと、「用意周到に失敗させる」くらいの余裕を持つことが大事だ。人材には「いる」「する」「なる」の3つの価値と側面をもつ。そのそれぞれに応じた活用の作法や支援のしかたがあることを意識することも大切だ。

6. アドバイザー自身のPR

文化とは「めぐみのめぐりあわせ」である。めぐみには「自然のめぐみ」、「時間・歴史のめぐみ」、そして「人のめぐみ」がある。「ふるさと絵屏風」はめぐみのめぐりあわせを促すプラットフォームになる。この取り組みは地域から地域へ広がっており、現在50地域あまりに展開している。また大学は「人のめぐみ」の宝庫である。地域と連携した「共育」によって、地域のなかに人が育つ場を育てたい。



地域再発見の媒体「ふるさと絵屏風」の例



学生の「触媒効果」が「他出子」を呼び戻す